

【氏名】長津 十

【所属大学院】(助成決定時) エクセター大学大学院

【研究題目】社会科学の「科学化」—合理的選択論の方法論的・実証的研究

【研究の目的】

意思決定理論とゲーム理論を基礎とする合理的選択論の隆盛は、第二次世界大戦後の社会科学の「科学化」を象徴している。同時に、合理的選択論の経済学、社会学、政治学、心理学等における流行に伴い、様々な観点からする合理的選択論への批判が生じている。重要な論点のひとつは、「社会科学は科学といえるのか?」「そもそも科学とは何か?」という極めて伝統的な科学哲学における問いである。本研究の目的は、合理的選択論が実際にどのように人間行動の研究(主に行動経済学/心理学)に用いられているのかを実証的に検討することにより、抽象的な科学哲学的問いを具体的な文脈で問い、社会科学の本質に関する知見を得ることである。より具体的には、合理的選択論や行動実験一般をア・プリオリな批判から救うとともに、社会学者が直面する本当の経験的・方法論的問題、その解決への端緒を示す事を目指す。

【研究の内容・方法】

研究は、アレクサンダー・ローゼンバーグ、ドナルド・デヴィッドソン等の哲学者に代表される、ア・プリオリな合理的選択論批判を批判することを出発点とした。前者は、合理的選択論を反証不可能な循環論法であるとし、したがって合理的選択論に基づく経済学は本物の経験科学としては失格だと結論づける。この議論は、テストの対象となっている理論が証拠の解釈に際して用いられた場合には、その証拠が当の理論を反証することは論理的に不可能であるという前提に基づいている。この一見もつともな前提は、例えばアインシュタインの相対性理論やユークリッド幾何学のテストの文脈に置いて誤りであるという事が示されている。現在の科学哲学的知見は、ある理論のテストが循環的であるかどうかは、ケースバイケースで判断されねばならない経験的な問題である、ということである。この観点に沿って、本研究は意思決定理論が実験により検証される過程を分析した。後者のデヴィッドソンは、合理的選択論は本質的に規範的な理論であるとし、従ってその純粋に経験的なテストは不可能であると結論づける。本研究は上記と同様の事例を引きつつ、この議論を検証した。何人かの研究者が指摘するように、意思決定理論の規範的側面は、理論と整合的でない観察を受けて理論を修正する際の発見的な手引きとして機能した。つまり理論体系において規範的なレベルの低い公理から順に修正するということが経済学者の間で行われた。これはデヴィッドソンの議論と整合的であるが、本研究はここからさらに進んで、今まで研究されてこなかった心理学者が意思決定論をテストするやりかたを実証的に分析した。具体的には、人々の選好を測定する方法には、ある財が個人にとっていくらの価値があるかを問うという方法と、実際に複数の財からより価値のある財を選ばせるという方法の、少なくとも2つがあるということに注目して検証を行った。

【結論・考察】

ローゼンバーグの議論に関して、実際には、意思決定理論のテストには理論負荷的な観察が用いられているにも関わらず、理論と整合的でない観察が多く見いだされる。人々の選好が「逆転」という現象はそのひとつである。これによりローゼンバーグの議論の前提は誤りである事が示された。デヴィドソンの議論に関して、実際には、心理学者は意思決定論の規範的側面には左右されず、ある現象(例えば温度、IQ など)の測定は、相互に独立の様々な方法によって行われなければならないという、経験科学に普遍的な規準に従ってテストを行っている事が示された。選好を測定する際に二つ以上の方法を用いるというのはこの例である。これにより、行動経済学／心理学の分野で、人々の選好は選好の測定方法によって左右される、という重要な経験的発見がなされた。これは意思決定理論が規範的であるという点とは独立になされており、デヴィドソンの議論の限界を示している。一般的に、ある理論が規範的かどうかは、それが経験的な文脈でどう使われるかと独立には決定し得ない。本研究は、これら二つの代表的なア・プリオリな合理的選択理論批判が科学の実践を無視した抽象的な議論であり維持できないということを示した。少なくともア・プリオリな観点から合理的選択論の「科学性」を批判するのは不毛であり、批判は科学の実際に即して行われねばならない、ということが示された。